

チャの秋挿しによる自家育苗方法の検討

～生産者の繁忙期を避けた自家育苗方法の確立に向けて～

生産者の繁忙期を避けた自家育苗方法として、チャの秋挿しの技術確立に向けて試験をしています。今回は育成者権が失効しており、県内で植栽事例が多い4品種で秋挿し苗の発根調査と‘やぶきた’での定植後の生存率調査を行いました。その結果、改善の余地はあるものの秋挿し、翌春植えが可能であることが示唆されました。

1. 背景と目的

奈良県では県内茶園面積の約8割を‘やぶきた’という品種が占めています。近年は‘やぶきた’に代わる品質、収量性が良い品種や直売向けの品種などへの改植が進んでいます。しかし、品種によっては苗木業者が扱っていない場合があり、その場合は生産者自身が挿し木により自家育苗を行う必要があります。奈良県で行われている挿し木時期は通常6月下旬ですが、生産者にとっては二番茶前の繁忙期にあたり、自家育苗を行うことは困難な状況です。そこで、生産者の繁忙期を避けた秋の挿し木と翌春の定植が可能であるか検討しました。

2. 研究成果の概要

2021年9月7日に4品種（‘やぶきた’‘おくみどり’‘やまとみどり’‘さみどり’）を4葉4節に調整し、挿し木床をビニール資材で密封し湿度の高い状態で管理する密閉挿しを行いました。2022年4月7日、8日に苗を掘り取り、発根率と発根量を調査しました。発根量は4段階の基準（表1、図1）で調査しました。

調査の結果、発根率は4品種の中では‘さみどり’が劣っていました。また、発根指数2以上の割合は‘やぶきた’68.5%、‘おくみどり’63.9%、‘やまとみどり’52.8%、‘さみどり’22.2%と、発根量でも‘さみどり’が劣っていました（図2）。

以上のことから、秋挿しも慣行の挿し木生産同様発根し、発根性には品種間差があることがわかりました。

また、この秋挿し苗を本圃に定植した場合の3ヶ月後生存率調査も行いましたが、‘やぶきた’

発根指数2以上の苗の生存率は75%でした（データ省略）。

表1 発根量の指数の基準

指数	発根量
0	発根が認められない。
1	1次根が5本以下。2次根はほとんど認められない。
2	1次根が5本以上。2次根が少し発根し始める。
3	1次根、2次根が全体的に多数発根



図1 秋挿し苗の発根量の違い（品種：やぶきた）

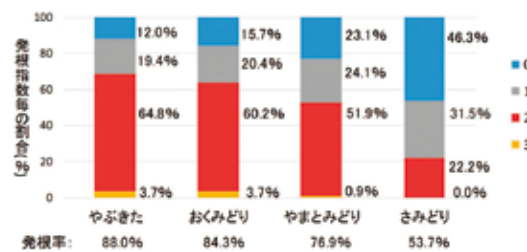


図2 秋挿し苗の発根率及び発根量の割合

3. 実用化に向けた対応

秋挿し自家育苗は、生産者の繁忙期を避けて行うことができ、従来の2年生苗よりも短期間での育苗が可能となります。しかし、今回の試験結果からは苗の発根率と本圃への定植後生存率についてさらに向上させる必要があります。試験を重ねていきたいと考えます。同時により多くの品種を対象として秋挿し苗の発根性の調査もしていきたいと考えています。

（大和茶研究センター 谷河明日香）

※種苗法の一部改正により登録品種の自家育苗は育成者権者の許諾が必要となりますのでご注意ください。